

# 稲作・畑作

営

農

情

報

## 幼穂形成期以降の水管理

- 中干しは、幼穂形成期（出穂の25日前）までに終了します。幼穂形成期以降は稲体の活力維持のため、間断かん水（カドミウム含有米の発生が懸念される地域は湛水管理）とします。
- フェーン現象など、乾燥した風が強く吹く場合には湛水管理を行います。
- 気象情報等で、減数分裂期（出穂の12日前）から穂ばらみ期にかけて、低温（日平均気温20℃以下、最低気温17℃以下）が予想される場合は、前歴深水処理（幼穂形成期頃から10日間程度、25℃程度の水を10cm位に保つ）で、冷害対策を実施します。
- ★カドミウム含有米の発生が懸念される地域では、**出穂期前後3週間（7月15日頃～8月25日頃）は湛水管理（水田に常時水を張り、土壌表面を空気に触れさせない）を厳守**してください。

## 栄養診断による追肥の判断

- 幼穂形成期の極端な葉色低下は、1穂着粒数の減少・有効茎歩合の低下を招きます。幼穂の発育状況と理想生育量を確認し、生育・栄養診断を必ず実施して下さい。
- 幼穂形成期に葉色が濃く草丈が62cm以上の場合、倒伏の危険性が高くなるので穂肥の施用を控えます。
- 緩効性肥料や育苗箱全量施用の場合はこの栄養診断はあてはまらないので注意してください。

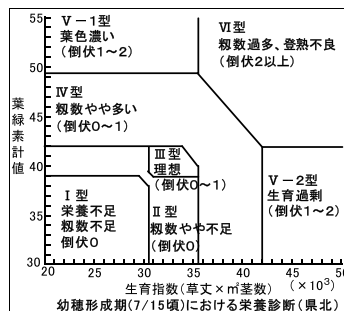
生育型	窒素追肥量(kg/10a)	
	幼穂形成期	減数分裂期
I型	2kg	2kg
II型	2kg	2kg
III型	ムラ直し1kg	2kg
IV型	なし	2kg
V-1型	なし	ムラ直し1kg
V-2型	なし	ムラ直し1kg
VI型	なし	なし

(注) 目標収量 570kg/10a、あきたこまち

幼穂形成期（11葉期：7月15日頃）の理想生育量（県北）

	草丈 (cm)	茎数 (本/㎡)	葉数 (葉)	葉色 (SPAD値)	生育量 (×10 <sup>3</sup> )
上限値	62	586	11.0	42	35.6
理想値	60	552	10.8	40	33.0
下限値	57	519	10.6	39	30.5

※生育量は草丈×㎡当たり茎数。



## 気象変動に対応した水管理

- 出穂期から開花期は最も水を必要とする時期なので、出穂後10日間は湛水状態にして水を切らさないように管理します。その後は間断かん水とします。
- 気温が30℃以上になる場合、根の機能減退を防止するため、用水が確保できる地区ではかけ流しかん水を行ってください。また、フェーン現象等で乾燥した風が強く吹く場合は、湛水状態を保つことにより稲体の消耗を軽減します。

## 病害虫の防除対策

### 【いもち病（穂いもち）】

- 葉いもちの発生が認められる場合は、出穂15～7日前にコラトップ粒剤5を散布するか、出穂直前と穂揃期に予防剤（ラブサイド剤またはビーム剤）の茎葉散布を行います。
- 葉いもちが多発している場合は、上記薬剤散布に加え、必要に応じて傾穂期にもラブサイド剤による追加防除を行います。

**注意：ラブサイド剤（フサライド）を含む農薬の総使用回数は「3回以内」です！**

### 【斑点米カメムシ類】

ほ場の出穂期\*を考慮し、適期防除に努めてください（※出穂期：全茎数の40～50%が出穂した日。少しでも穂が出ていれば出穂とみなします）。

- 1回目薬剤散布：スタークル剤またはアルバリン剤の茎葉散布剤を、出穂期10日後頃に畦畔を含めて散布します。
- 1回目の薬剤散布後7日以内に農道・畦畔の草刈りを行います。その後はカメムシ類を水田内に追い込まないため、収穫2週間前まで草刈りを行いません。
- 2回目薬剤散布：多発が予想される場合や、水田内に出穂したカヤツリグサ科雑草やノビエが発生しているほ場、休耕田等の雑草地に隣接したほ場では、**出穂期24日後頃**にキラップ剤を畦畔を含めて散布します。
- 法面や休耕田等の雑草地は、稲の収穫2週間前までは草刈りをしないでください。
- 近隣に水稻以外の作物（野菜等）がある場合や、養蜂業者がいる場合は、薬剤散布前に情報交換を密にし、散布を実施してください。

来月のあなたの運勢（2019年8月）



牡羊座

(3・21～4・19) レジャー運良好。気の合う仲間たちと出掛ければ、わくわくうれしい発見あり。実力発揮のチャンスがある予感

2019.7月号

しらかみ

